

金の異常な輝き

週初に金価格が1トロイオンス1600ドルを超えた。もちろん史上最高値だ。夏には金価格は低迷するのが通常のパターンだが、今年はそうではない。異常だ。最近は何かがたくさんあるので、異常は時代の特徴かもしれない。

それにしてもリーマンショック以降、金価格はたいした調整もなく上昇を続け倍になった。金の上昇の背景には、通貨に対する不信、特に基軸通貨ドルへの不信、インフレヘッジ、特に新興国のインフレ圧力のたかまり、欧州中銀の金売却の減少、中国やインドなどの金需要の高まり、などが上げられる。

特に中国とインドの需要は世界の半分以上を占める。他にも中東は伝統的に金需要が強く、中東北アフリカで2割を占める。

金がこれほど求められるのは、固定相場制の崩壊前夜以来ではないだろうか。戦後の国際通貨体制は金ドル本位制とも言われるが、ドルと金は1オンス35ドルで結びつき、他の通貨はドルと固定的なレートが設定された。

米国の貿易収支が悪化するにつれ、黒字国は増加する手持ちのドルを金に換えるように米国に求めた。最初のうちは交換に応じていた米国も次第に金が底を着き、金とドルの交換を停止せざるを得なくなった。

こうして固定相場制は崩壊するのだが、ドルに金の裏づけがなくなった現在は市場で金を求める。その動機には似たところがある。違うのは金を求めたのが以前はドイツやスイスなどの貿易黒字国であったのが、現在は中国やインドが主力だ。中国は貿易黒字国だがインドは違う。インドはむしろインフレ懸念だ。

だが共通しているのは通貨不信だ。その中心にドルがあり、2番手の通貨ユーロも構造問題を抱えていては、通貨不信は募るばかりだ。

話は変わりますが、「通貨戦国時代一円高が続く本当の理由」(朝日新書)が出ました。興味ある方はご一読を。